嶋 嶺 雄

中

## 無視できぬ潜在的復原力

いてきたのである。 史的過程としてわれわれの同時代史を貫 中ソの対立・抗争は、とうして一つの歴 としても、いわゆる中ソ論争発生以来の められた角逐については、いま触れない 沢東、コミンテルンと中国共産党との秘 年になろうとしている。スターリンと毛 両共産党間に生じ、「東風が西風を圧倒 国内部で物議をかもして以来、 する」との毛沢東発言が当の社会主義諸 からはわからない亀製がすでに中ソ 8510

双方が、今日、社会主義の両大国とし る。この事実一つをとっても両者の関係 対時していることは周知のところであ 〇十にもおよぶ長大な国境線をはさんで とのように対立しつづけてきた モンゴル国境も含めると実に七三〇 中ソ

関係を調整可能なものにする空間的現実 は中ソ国境の全長よりもさらに遠く隔た れ地球機を三分割するほども離れた地点 が、同時でモスクワと北京とは、 は宿命的に曖嫉の多いものだといえよう であることも忘れてはなるまい。 っている。との隔たりは、 に位置しているのであって、両者の距離 また、 両者の それぞ

昨年二月のモスクワ滞在中に、

私は、

彫りにする手がかりになるような気がす 二、三のエピソードは、 がこの問題を考えようとするとき、次の 可能性について、いま大きな関心が集ま え「四人組」打倒の北京政変が起とった な体験である以上に、問題の性質を浮き るのは当然である。そうしたなかで、私 今日であってみれば、中ソ関係の変化の ところで、毛沢東ついに去り、そのら 私自身の個人的

b 〇年代前半の中国共産党最高指導者であ 10 b すでに本埋郷の立派なものになってお 二月に再びそとを訪れると、王明の墓は 年暮れの雪の大晦日であった。昨七六年 答死)の墓を最初に見いだしたのは七五 30 道院墓地で王明(七四年春にモスクワで 私がモスクワの有名なノボデヴィチ修 巨大な王明の胸像が建てられてい いうまでもなく王明はかつて一九三 一貫した親ソ派として毛沢東主義を

是

ス・カーピッア・ソ連外務省極東第一部 楽・実行している直接の資任者エム・エ グロムイコ外相のすぐ下で対中政策を立 る二人の著名な学者と会見した。一人は

(モスクワ大学教授)であり、もら一

最後まで批判しつづけてきた人物 ソ連の対中国政策決定過程に関与してい 識しないわけにはいかなかった。 党内闘争との深い相関関係を改めて再認 このように立派に構築されていることを ぐ近くにソ連側から手厚く保護されて、 な語題を提供したフルシチョフの墓のす る。それだけに、王明の墓が、さまざす

だろうか(一九六九年三月、珍宝島付近でも この根深い敵意と相互不同はいつ解消するの み合う中ツ両国の国境警備隊)=UPIサン

であ



鄧小平

朝日ジャーナル

私は、中ソ関係と中国共産党の

ソ連の対中政策に大きな発言権をもち、 ツア氏は中ツ関係史の専門家であるが、 務省史料調査局長(モスクワ大学教授、 ス・エリ・ティフヴィンスキー・ソ連外 人は、ソ連中国学界の大御所でもあるエ

『近現代』誌編集長)であった。カービ

明された」旨の声明付きで釈放し(七五 見交換と中ソ関係の将来についての計論 中ソ国境会談にソ連代表団の顧問格とし を書いて注目されたが、彼もコスイギン 〇周年記念日には早速、孫文を大いにた 高く、今回の北京政変後の孫文生誕一一 あった。それだけに、カーピツア氏もテ をふりあげて怒っていた姿が思い起とさ 中国の西側への巧みな宜伝だと、こぶし たばかりであったが、とのような中国の グナルかと、とくにワシントンを驚かせ 年一二月二七日)、すわ中ソ和解へのシ たえ、中ツの友好の歴史を回想する論文 フウィンスキー氏は孫文研究家として名 如として実現した北京空港でのコスイギ 必ず打倒されると自信ありげに語ってい るととが明白であり、「毛沢東集団」は ソ関係にとそ並々ならぬ期待を寄せてい についてではなく、「毛沢東以後」の中 れる。カーピツア氏もこの点では同様で 措置にたいしてティフヴィンスキー氏が ていたソ連のヘリコプター乗組員三人を たま中国政府が、スパイ容疑で拘留され に限定したととはいうまでもない。 な会見の大部分を中国情勢についての意 て加わっている。私がとの両氏との私的 ン・周恩来会談にも同行している。 『イズペスチャ』七六年一一月一二日) 一九六九年九月、中ソ国境衝突直後に突 (「革命的民主主義者――ソ連の友」、 周恩来会談の結果開かれた六九年秋の 取り調べの結果、ソ連人らの善意が証 フヴィンスキー氏も、当面の中ソ関係 たま

> 以 あったし、なにしろ、外国人の少ないウ 関に立っていた。当日私は在ウランパー である。と思っていたら、そとへスミル のだが、どらも大使の様子が気ぜわしげ て私の中国入境にかんする好意に激した 私を出迎えてくれたのかと思わず恐縮し ランパートルのこと、てっきり張大使が トルの新華社記者に大使館で会ら約束が 大使館を訪れると、張偉烈・中国大使が支 国入境査証の件で指定された時刻に中国 月、モンゴル人民共和国の首都ウランバ が秘められているかのようであった。 た。その強い語調の背後には、「毛沢東 もら一つのエピソードは、七五年一 トルでの体験である。 後」へのきわめてしたたかな対中戦略 そのとき私は中

> > パフ・ソ連大使が二人の随員を伴って到済、中ソ両大使一行はあたふたと大使館務、中ソ両大使一行はあたふたと大使館務、中ソ両大使一行はあたふたと大使館務、中ソ両大使一行はあたらしいのだが、今(表敬訪問)であったらしいのだが、今(表敬訪問)であったらしいのだが、今(表敬訪問)であったらしいのだが、今(表敬訪問)であったらしいのだが、今(表敬訪問)であったらしいの話者が存在しない「陸の孤島」とではなかろうか。

原力〉になり得るであろう。 おれわれ外部の者が関与し得ない部分が存在していることを忘れてはならないであろうし、その部分とそが中国内政の帰あろうし、その部分とそが中国内政の帰るととを忘れてはならないで

### 北京政変と中ソ関係

2

毛沢東の死、そして、いわゆる文革派 上海グループ「四人 組(四人帮)」の一 相 (四人帮)」の一 を 遡及するとき、スターリン時代以来の 立れたのである。中ソ対立の歴史的経緯されたのである。中ソ対立の歴史的経緯されたのである。中ソ対立の歴史的経緯されたのである。中ソ対立の歴史的経緯されたのである。中ソ対立の歴史的経緯は、いまや中国の政治舞台から消去されたのである。中ソ対立の歴史的経緯は、いまや中国のなかで形成されてきた毛沢東その人ののなかで形成されてきた毛沢東その人ののなかで形成されてきた毛沢東その人ののなかで形成されてきた毛沢東その人の

意味しよう。

意味しよう。

意味しよう。

意味しよう。

件の背景にあった毛沢東政治への民衆の上、同年四月の天安門事件以後は、この事を示したとき、実は前述のヘリコプター乗員釈放事件の担当者が華国鋒・公安相乗自釈放事件の担当者が華国鋒・公安相乗のであったらしいことをいちはやく 察知であったらしいことをいちはやく 察知であったらしいことをいちは、昨年二月初旬、華すでにモスクワは、昨年二月初旬、華

切停止して今日にいたっている。 北京におけるソ連大使館爆発事件にたい しても、きわめて懐重かつ穏やかな姿勢 をとりつづけたのであった。毛沢東路線 をとりつづけたのであった。毛沢東路線 での直接の批判は、毛沢東死去以後、一

慶節には関係正常化を呼びかけた党中央 えると、毛沢東の死を悼む丁重な弔電が 戦り、中ソ国境付近での中ソ双方住民の のメッセージが送られた。一〇月二五日 ソ連共産党中央から発せられ、次いで国 和解と友好ムードがかもしだされた。次 日にはソ連共産党中央委総会でブレジネ にはソ連・モンゴル共同声明のなかで じめたのである。まずその経過をふりか 日に寄せた祝電を全文掲載し、翌一〇日 日付『プラウダ』は中国が十月革命記念 て中国批判が一切消えていた。一一月九 ける革命式典では、これまでとは異なっ を呼びかけ、一一月七日の赤の広場にお でクラコフ政治局員が再び中ソ関係改善 いで一一月五日には十月革命記念前夜祭 ソ連当局の代弁者として知られるビクタ のち、同月二八日には華国鋒新主席就任 フ書記長が同様の呼びかけをおこなった への祝電が発せられた。翌二九日には、 「善隣的協力」が呼びかけられ、翌二五 こうしてソ連は用意周到にも対中和解 ンドンの『イプニング・ニュース』に ・ルイス記者の黒竜江近辺取材ルポが ・戦術をはやくも実行に移しは

には中国が国慶節へのソ連のメッセージ

になってからの中国内部における周恩来 を示して対前年比四〇%増(三億七三〇 めて満足の意向を示している。 礼賛と鄧小平復活要求の潮流にも、 〇万で、が見込まれるにいたった。新年 度の中ソ貿易は、この秋にかなりの伸び ける編集へと転じ、 その内容を一変させて中ソ友好を印象づ 花『極東の諸問題』(七六年第四号)も かで科学アカデミー極東研究所刊の季刊 〇年ぶりだとの見方もある。こうしたな 中国の党主席の姿が映し出されたのは二 のなかで華国鋒主席の姿を映し出した。 変大会常務委員会開催を伝えるニュース が再開されたのである。次いで一二月二 麦(外務次官)とのあいだで中ソ国境会談 次官)が北京に帰任し、中国側の余湛代 沙再開のためにイリイチョフ代表(外務 納ののちに、一一月二七日、中ソ国境交 にたいして感謝の返置を寄せたと異例の 報道をおとなった。とのような一連の経 、ソ連中央テレビは中国の全国人民代 一方、すでに七六年 きわ

革命記念日に祝電を打って「中国とソ連 が原則的な問題で反目しているからとい 月六日には北京のテレビがソ連十月革命 かたくなな態度をくずさなかった。 電や祝電さえ受けとりを拒否するなどの け身であり、きわめて消極的でさえあ 攻勢にたいして、中国側は依然として受 記録映画を放映し、翌七日にはソ連の このようなソ連側の積極的な対中和解 当初はソ連・東欧諸国の党からの弔 両国の正常な国家関係まで妨げら

> 談でしばしば同じ姿勢を表明して、中国 示唆したのであった。 の原則的立場には当面変化のないことを 解の呼びかけを強く拒否する姿勢を示 の演説と、三回にわたってソ連の対中和 説、一二月二一日のハムディ・イエメン けてきた李先念副首相は、一一月一五日 ペ・タンザニア第一副首相歓迎宴での演 の演説、一二月八日のアプード・ジュニ のポカサ・中央アフリカ大統領歓迎宴で 外交不在とも思われるなかで発言をつづ 北京政変以後、裔冠華外相の失脚など、 明らかにし、一二月二〇日付『人民日 し、この一月中旬にも外国訪問者との会 の対日政策を激しく非難した。との問、 ンジンの使い分け」と題する論評でソ連 報』は「人にいえぬ目的をもつムチとニ が本年も相変わらず続発していることを の担当者は、中ソ国境でのソ連側の侵犯 月中旬、黑竜江省革命委員会外事事務室 判をつづけている。とうしたなかで一一 ークし、『人民日報』や新華社も対ソ批 して進展していない旨を中国側は再三リ った。再開された中ソ国境会談も依然と れるべきではない」と表明するにとどま アラブ共和国軍事評議会議長歓迎宴で

対ソ関係にかんしては、毛沢東の現代修 の死に際して述べたように「当面、こと ら。他方、中国側は、私がかつて毛沢東 は、 あり、、見えすいたもの、だとも思われよ とのような事実経過をふりかえってみ あまりにも作為的かつ一方通行的で との間のソ連側の対中姿勢の変化

> ゆくはずである。 さまざまな戦略・戦術を執拗に行使して 対中和解へ向けて中国をゆさぶるために み込んでいるはずであり、今後も当分は 中国の出方を当然のこととして十分に読 う。しかし、ソ連側としては、こうした らな姿勢を余儀なくさせているのであろ 確定な要素の多いことも、中国にこのよ 下の中国内政に依然として不安定かつ未 四日号)ことを示している。華国鋒体制 制は解体する」、本誌一九七六年九月二 にならざるを得ない」(拙稿「毛沢東体 政策の変化にたいしてはきわめて保守的 向や逸脱への警戒心の方が先に立って、 正主義批判・反覇権主義の立場からの偏

ソ連側の最大限目標である親ソ政権成立 るがゆえに、党内闘争の推移いかんでは ねに中国共産党の党内闘争と相関的であ わけではない。もとより、中ソ関係はつ 中ソ関係のルネサンスとして考えている 和解への道をかつての五〇年代のような もともとソ連側としても、当面の中ソ

点まで、さらにはゼロの地点まで引き段 戦術を行使するつもりであろう。 るので、ソ連としてはこの範囲内で硬 ゆる国家関係の改善だけでも十分であ 目標としては一定の外交上の和解(いわ とのことを暗示している。一方、最小限 るわけではない。先に見たように王明を の可能性さえ存在することを否定してい 立場は強いともいえよう。このようなし まではいかずとも、 般にとってマイナス一〇〇点になってし 中ソ関係はソ連の世界戦略・対外政策全 ソ連側がいかに丁重に遇していたかも、 ら、次の戦略構想をもすでに内蔵してい は、したがって、もしも中ソ和解を実現 な戦略的勝利だと考え得るだけにソ連の すことができれば、ソ連にとっての大き まっており、この中ソ関係をプラス点と 軟、陰陽、直接間接のさまざまな戦略 し得なかったときにはどうするのかとい たたかな戦略的配置に立つソ連として マイナス五〇点の地 今日の

るように思われる。

### 米 ソ 0 対中ゲ ] 人

3

neuverabilty)を著しく低下させてしま て保持してきたマヌヴァビリティー(ma ではなく、同時に、中国が国際社会におい 酷烈な政治ドラマが世界を驚かしただけ らけだしてしまったことは、 その内部の激しい権力的角逐の実態をさ 周恩来そして毛沢東を欠いた中国が、 たんにその

極制造の解体過程が進展し、 りにされるとともに、 2 在であるだけに、アメリカとしてはこの そらしたなかでの中ソ和解の可能性の存 基本構造がいま再浮上しはじめている。 ステムの拮抗という国際政治の本来的な た。 とうして、 中国 いわゆる米中ソニ の実像が浮き彫 米ソニ元シ

1977. 2. 4

りを戻すのか、 近競争ないしは『中国獲得競争』 のだが、その本質は、米ソ双方の対中接 なってきた。とうして、はやくも中国を 際環境の現実になろうとしている。 めぐる国際関係は大きく流動化している 従来以上の対中接近を進めねばならなく 最大の悪夢をかき消すためにも、華国鋒 いった関係が、すでに中国をとりまく国 新政権をソ連の側へ追いやらないように 俗な表現をすれば、中国がソ連とヨ アメリカと組むのか。と であっ

提携は可能か」(『フォーリン・ポリシー』 切るべきだとの意見がかなり根強かっ 急ぎ、すみやかに米中国交樹立を実現 解へ進むのをはばむためにも対中接近を 内部には「毛沢東以後」の中国が対ソ和 ら。よく知られているように、アメリカ 関係改善の可能性が出てきただけアメリ たマンスフィールド上院院内総務の帰国 シュレジンジャー前国防長官やフォード のであった。毛沢東死去前後に訪中した 季号)やランド・コーポレーションのマ 『フォーリン・ポリシー』一九七六年夏 レン・プラウン論文「中国の政治とアメ 力は守勢に立たされているともいえよ さらに激しく錯綜するであろうし、中ソ イケル・ピルスペリー論文「米中の軍事 大統領の特使として毛沢東死後に訪中し 九七五年秋季号)は、その代表的なも とのような米ソ双方の対中ゲームは、 場合によっては対中軍事援助に踏み 米CIA中国分析官のロジャー・グ ―三角関係の再検討――」

> ている現況においては、アメリカとして じ、その変化をソ連が虎視耽々と注視し 変とによって中国内政に大きな変化が生

いよいよ本格的に対中正常化への道

されていたのだが、毛沢東の死と北京政 正常化のテンポがフォードニキッシンジ 意見に立つ論調が多い。とうしたなかで よく見きわめたらえで決断すべきだとの 紙も最近では、 和党のカーチス上院議員によるマン チャード・レ・ウォーカー教授(サウス 新政権のプレーンとも目されているロ ジャーのライバルであり、いまカーター 学の国際関係センターでかつてキッシン 報告も、とのような基調に立っていた。 ャー時代よりやや遅れるであろうと展望 ン・サイエンス・モニター』などの有力 ストリート・ジャーナルは、『クリスチャ ィールド報告批判なども存在する。 ンスフィールド氏と同じとろ訪中した共 カロライナ大学)らの慎重論も根強く、マ ート・ポーウィー教授や対中タカ派のリ 一般には、カーター政権の時代には対中 ューヨーク・タイムスーや『ウォール・ 方、アメリカ国内には、ハーバード大 アメリカは中国の動向を スフ 関係の方が成熟のテンポがはやいととを 示したのである。 紫に応えるかのように一月一一日付 題での討談は従来の一般論を超えたもの 諸分野」を中心とする非公開会議を開 た。当面はやはり、中ソ関係よりも氷巾 **奮闘しよう」を掲載して、台灣問題の** の革命外交路線を貫徹、実行するために 民日報』は中国外務省理論学習組 れた。そして、こうしたアメリカ側の様 とを具体的に討議したものとして注目さ であり、さまざまな条件とフォーミュラ たが、との会議の台湾問題や米中国交問 がアーリントンに集まって「米中関係の 報各当事者とカーター政権に近い学者と メリカでは昨年末、政府の外交、国防、情 がしきりであった。そのような折しも、 「交渉による解決」を示唆したのであっ 「周総理の輝かしい手本に学び、毛主席 ルの折衝はゆきづまっていたとの情報

論文 7

含む軍事提携に際して、川中国はソ連と 外交が展開され得ること、中国に武器を 提供しても中国は政治的 軍事提携によってアメリカに有利な中国 としては、その理由として、 事事情を視察してきたシュレジンジャー 供を進言したといわれている。 ると、中国から帰国したシュレジンジ て脅威にならないととなどを挙げたとい ー前国防長官は、 そして最近のワシントン筋の情報によ しかも、中国にたいする武器援助を 中国への軍事援助、とくに武器の提 フォード大統領にたい ・軍事的に決し とのような 中国の軍

中

も考えられよう。 カーター政権にたいしても生きていると と進言したといわれており、 ねる、などの条件を中国側に提起し得る 将来に関しては北京と台湾の関係にゆだ 湾の暫定的な「独立」を認め、国台湾の 台湾から撤退するかわりに、③中国が台 和解しないとと、 ②台灣問題では米軍が との進言は

ジャーナリスト、ビクター・ルイス記者 姿勢を示したのは、とのような経緯があ 対中威嚇にたいしてきわめて強い対抗 の決断」をすると威嚇したのである。 を見いださないならば、ソ連は「不退 グナルを真剣に受けとめ、 やくも北京政変直後の一〇月一四日、バ ゾルザ記者の論説も指摘していたよう ビューン』一一月四日付のビクター のか、ソ連側が対中和解への提案と同時 ったからであった。 のハーバード大学での記者会見でソ連 ッシンジャー国務長官が一〇月一五日夜 意思を伝え、しかも、中国の新指導者が たちでソ連側の対中和解への並々ならぬ リとロンドンの西側の新聞を利用するか をいちはやく登場させた。同記者は、 に、ソ連側は例によって西側向けの専用 ー・S・プラッドシャー記者の論説およ トン・スター』一〇月一九日付のヘンリ たととに注目せざるを得ない。 に中国へのプラフ(脅かし)をかけてい 「とと一カ月のらちに」ソ連の和解のシ とのような米中関係の成熟を予測した 『インタナショナル・ヘラルド・トリ 「共通の言葉 『ワシン は

えすのみであって、最近の米中間事務レ しているので、いきおい原則論をくりか 家を欠き、内政的にはなお問題を多く残 沢東、周恩来といった決断力のある政治 とそ望むととろであろうが、中国側は毛 国が台湾問題で一定の保証を与えるとと いる。そのようなアメリカにとって、 を模索しなければならなくなりはじめて

7

側が対中子防戦争のプラフ戦略をアメリ した結果、きわめて強い拒否通告をモス カ側に打診し、当時のニクソン大統領は 六九年夏、中ソ国境衝突ののちに、ソ連 国家安全保障会議を招集して協議

のがあろう。 述にあったコスイギン首相をして急遽、 いら歴史の重要な一コマを想起させるも 北京空港での中ソ会談に向かわしめたと クワに送り、そのことがハノイ訪問の帰

# 焦点となる中国内政の推移

4

見なければならない。 中国内政の推移いかんにかかっていると にあって、中ソ和解へのカギは、結局、 とうした米ソ双方の対中ゲームのなか

性という大きな特質を忘れてはならな 国は当面、 恩来路線」 るように思われる。 ダーシップの体質そのものにかかってい あって、中国内政の底深い混沌と不可測 とのような見方は、あくまでも一般論で て、中ソ和解には向かわないであろうと の現代化) の現代化」 上の課題であり、とくにいわゆる「四つ いかんにかかっており、したがってリー い。今後の問題はやはり党内闘争の推移 の見方が一応は可能であろう。しかし、 の交流を拡大するであろらし、したがっ ても西側諸国、とくに日本やアメリカと この場合、中国は当面、国内建設が至 とうした経済的必要性からし に象徴される「周恩来亡き周 (工業、農業、国防、科学技術 が復活するのであるから、中

解を求める一定の動きが潜在していると して注目しており、軍の内部には対ソ和 との点でソ連側は、中国の軍部に一貫

> 目立っている。とれらの旧リーダーたち 存在してきたことは否めない。しかも今 みなしている。たしかに、中国の軍内部 とはそもそも大きく異なっていたのであ えるのであり、鄧小平自身、羅瑞卿とと を擁護していると思われかねない論調も かつての彭徳懐―羅瑞卿の軍近代化路線 なかには、 るまい。最近の一連の「四人組」批判の がすでに復活していることも忘れてはな して失脚した六〇年代中どろの総参謀長 には立ち得ず、との点で毛沢東の対ツ観 立場にはありながらも反ソ・反覇権の場 もに、旧実権派として、同じソ連批判の った五〇年代中ごろの総参謀長・粟裕ら 日、かつて林彪の「人民戦争論」と対立 には、これまでつねにそのような志向が とは周知のところである。 が北京で一段と色濃くなってきていると る。しかも本年に入って、「鄧小平の影」 は、広い意味での鄧小平ラインだともい 羅瑞卿や、「親ソ派」の彭徳懐に近か 「四人組」を批判するあまり、

問われているのだが、北京政変以後、四 とうしたなかで葬国鋒政権の安定性が

> 史が任命され、循冠轄解任と黄華新外相 道があったが、中国の政治秩序に占める なっていて、 的・組織的にエンドース(裏付け承認) カ月近く、いまだに新政権は党中央委員 ばかりではない。 抗」、「流血」の情報も決して過去のもの 東省、湖北省などでの「反乱」や「抵 ら。そらしたなかで福建省、 第二回全国会議についても同様であろ に足る政治的意味をもつものではなかっ しいリーダーシップの形成と安定を示す イメージアップには貢献したにせよ、新 ても、この常務委開催は、華国鋒政権の の任命がなされたにすぎないことからし 二人も存在した同委副委員長に鄧穎超女 全人代常務委員会の位置を考えると、二 会が大々的に紹介されるという異例の割 末に開かれた全国人民代表大会常務委員 は麻痺したままである。との問、 務委員会は華国鋒と葉剣英の二人のみに されていない。そもそも党中央政治局常 会総会ないしは党大会などによって制度 た。一二月下旬の「農策は大寨に学ぶ」 「党中央」の政策決定機能 四川省、広 一月

能共同社説「偉大な歴史的勝利」が明ら なかろうか。 華国鋒への支持が集中したものの、「毛沢 反発はきわめて根強かったがゆえに、 革派上海グループにたいする中国民衆の 東以後」の時代のリーダーとしてはまだ 全面的な承認が与えられていないのでは 「四人組」打倒の"功績"にたいしては 咋客の天安門事件が示したように、文 しかも一〇月二五日付三紙

うことが歴然としてしまった。 華国鋒が大いに称えられているのだとい えに、彼らが今日悪しざまに開倒され、 の末に、「四人組」が「食われた」がゆ 軍事委員会主席就任が決定されたのであ てはじめて華国鋒の党主席および党中央 り事件当日に「四人組」逮捕を代償にし かにしたように、去る一〇月七日、つま 「食らか食われるかの闘争」

内部の矛盾」の方式で彼らを批判せず、 むのではなかろうか。現に中国内部に 鋒政権の将来を大きく拘束し、華国鋒と むほど、事件の本質は葬国鋒のクーデタ (『人民日報』一二月一七日)を読めば読 集部論文『滅亡寸前の狂気 のあがき」 は、なぜ「団結―批判―団結」の「人民 しては自己の説得的な正統性の原理に悩 ーであることが明白であり、 な疑問も広がっているという。 は、ある種の "ルール違反" として華国 一挙に打倒してしまったのかという深刻 政変の経緯を詳述した『人民日報』編 との事実

トしており、一方、葬国鋒礼費が日まし とする郊国鈴体制の矛盾がある。 あろう。ことに毛沢東路線の継承を旗印 鉢礼費は、 威を損ならものであろらし、異常な華国 つつある。江青夫人らにたいするとのよ に高まって一種の英雄崇拝がおこなわれ のトーンはますますどぎつくエスカレー それにしても、最近の「四人組」批判 華国鋒自身の不安の反映でも 間接的に毛沢東その人の権

こうしたなかで、 いわゆる実権 派

を否定する五六年段階へ回帰しようとし政の方向が「社会主義社会での階級闘争」以の方向が「社会主義社会での階級闘争」以の方向が「社会主義社会での階級闘争」が結局は周恩来=鄧小平路線として中国が結局は周恩来=鄧小平路線として中国が結局は周恩来=鄧小平路線として中国が結局は周恩来=鄧小平路線として中国が結局は周恩来=鄧小平路線として中国が結局は周恩来=鄧小平路線として中国が

である、ソ連の対中和解への提案を受容であて、ソ連の対中和解への提案を受容であて、ソ連の対中和解への提案を受容である。

の大きなカギであろう。

# 5 関係改善はどこまで可能か

現実にはまだ多くの曲折があることも否 いわゆる「第三世界」外交のなかの「反 めない。そうしたなかで、当面、中国の もに注目すべき点である。 で敗北した日本共産党の将来の方向とと ったことを想起すべきであろう。総選挙 わゆる「実権派」レベルで同一線上にあ 京一平壌ーハノイー東京(日共)と、い 年までのアジアの国際共産主義運動が北 であろう。との点では、かつて一九六五 がどのように変化するのかを注目すべき まず第一に注目すべきであろうし、第 ソ主義」にどのように変化するのかを は、その論理的可能性にもかかわらず、 (前労働党)、日本共産党など兄弟党関係 二には、中国共産党とベトナム共産党 とうして見たとき、中ソ和解への道に

が明確になってゆくのであろうが、私自敬いてゆくのではなかろうか。そうした敬いてゆくのではなかろうか。そうしたなチャンネルにおいて中ソ関係が徐々になり、このような間接的・迂回的

らに や政府のレベルの対立関係が再現すると ろうし、このような宿根のために再び党 nation conflict) は依然として残る であ state conflict) や民族間対立 (nation-to-的な国家成立以来の国家間対立(state-to-うな和解の可能性にもかかわらず、近代 が出てきたことになる。しかし、このよ ty conflict)のレベルまで調整し得る条件 ベルのみならず、党間対立 (party-to-par vernment-to-government conflict) 前提に従えば、本誌でもすでに述べたよ 係の将来を方法論的に位置づけるときの 中ソ対立の構造的性格を認識し、中ソ関 身が中ソ対立の将来を考えるに際して、 とも考えられよう。 中ソ関係は今日、政府間対立 (前掲「毛沢東体制は解体する」参 のレ (go-

頭のモスクワでの中ソ会談は中ソ友好同視し得ないところである。一九五〇年初ならば、中ソ関係には対立・抗争の半面ならば、中ソ関係には対立・抗争の半面

ある。 来してしまった。しかし、 との対立が決定的なものとなってしまっ 進」政策によってフルシチョフと毛沢東 夏以降は台湾海峡の危機や中国の「大躍 真の中ソ友好の時代は短く、一九五八年 ることができたのである。しかし、この 国はこのとき初めて対ソ平等化を実現す を訪問して中ソ関係の改善につとめ、中 後、一九五四年にフルシチョフらが北京 ーリンと毛沢東との運命的な角逐を招 結の表面的な跨示にもかかわらず、スタ 盟条約締結による中ソ友誼の一枚岩的団 へ飛んで中ソ改善を試みようとしたので フ解任を見るや、周恩米は急遽モスクワ た。ところが一九六四年秋のフルシチョ スターリン死

解いステップが、ソ連側のイニシアチプ 経緯を知るとき、毛沢東なき中国との和 談となって世界を驚かせた。とのような を北京にさし向け、北京空港での中ソ会 中ソ戦争の不可能性を認識せざるを得な 争の危機にいたったのである。 距離はフルシチョフ時代のそれよりも隔 係改善を達成しようと努めるであろう によって強く刻まれはじめたとしても、 かったソ迎は、一転してコスイギン首相 たり、一九六九年には一触即発の中ソ戦 当面、ソ連は一九八〇年に満期となる中 それはまたきわめて当然だといえよう。 九年春までに中国との政府間レベルの関 / 友好同盟条約の改定交渉をまえにして (改定の場合は一年前に通告)、一九七 だが、やがてプレジネフと毛沢東との しかし、

いことになる。

現しなかったとき、ソ連はこれまで以上 にせよ、今日のソ連による対中和解への の戦略をすすめる可能性をも留保してい 谷間の存在から離れた台湾は、そのとき の進捗を意味するであろうから、米中の を中国が裏切ることは、半面で米中接近 なるかもしれない。とうしてソ連の期待 に貧欲な対中封じ込め戦略を行使し、た に、もしも、この期間中に対中和解が実 イスの対中威嚇に示唆されているよう であろうが、しかし、先のビクター・ル 切られた状況へのソ連の不気味な衝動が 強い期待は、その背後に、この期待が裏 る。このような想定はあるいは極限的な ソ連との関係を公然と結んで自己の生存 東艦隊を中心とする海洋戦略を含めて大 んに中ソ国境の軍事戦略のみならず、極 かくされていることも無視してはならな スペキュレーションであろうが、いずれ 大的な対中戦軍事戦略を展開することに との点でも一九七七年は注目すべき年

このような中ソ関係の将来に直面せざるを得ないわが国としては、対中・対ソ 外交のありようをいまこそポジティブな 政策として十分に考えればならない時期 にきている。「中ソ等距離外交」という 俗説を排した「対中・対ソ・ダイナミック・バランス」の主体的な日本外交をいまこそ確立すべきであろう。

(なかじま みわお・東京外国語大学助教授)

### 報道 解説 評論 日 17 17 18 18 200 200 200 4

1977

論壇の角影グループ1984年

編集部/神島二郎/中村武志 中ソ和解のカギ一鄧小平復活問題中嶋嶺雄 PLOとイスラエルのパリ秘密会談 牟田口義郎 公共投資優先の新予算案を批判する 和田八東 現代社会主義論争 似田貝香門

